

歳こそは取りたくないものである。

たしかに人生経験を積み、物事の道理も自分なりに理解し、あきらめることも覚えたせいで気持ちがぶれることも少なくなってきたが、鏡のなかの自分を見るたびに、いったいこの顔はどこまで枯れしぼむのだろうかとうんざりしてしまふ。

単純な経済の法則に照らし合わせれば、ものの価値は需要と供給のバランスによって決まる。需要が供給を上回れば値があがるし、逆に供給が需要を上回るならば当然値は下がる。これから訪れる高齢化社会においては、老人の供給は需要をはるかに上回ることになる。つまり、年寄りの価値は底なしの暴落を続けてゆくことになるであろう。

わたしは今年で四十八歳になったが、五十歳から先になにか明るいも

老いを忘れさせるもの

東山 彰良

のが待っているのだろうか？ 拙著『イツ・オンリー・ロックンロール』でも引用させてもらったが、こんなアメリカンジョークがある。

三歳のときに大切なことは、おしっこを漏らさないこと。

十歳のときに大切なことは、友達

プロムナード

をしつめること。

二十歳のときに大切なことは、上手にセックスをすること。

三十歳のときに大切なことは、金を稼ぐこと。

四十歳のときに大切なことは、金を稼ぐこと。

五十歳のときに大切なことは、上



手にセックスをすること。

六十歳のときに大切なことは、友達をしつめること。

七十歳のときに大切なことは、おしっこを漏らさないこと。

なんとも暗澹たる気分にはさせられる。老いは恐ろしい。秦始皇帝でさえ不老不死を求めあまり、水銀を練りこんだ丹薬を飲んでかえって死

期を早めてしまった。

残念ながら、老いを食い止める方法など、どこにもありはしない。が、老いを忘れさせる手立てならまったくないわけでもない。『論語』に次のようなエピソードがある。

ある日、楚の葉公という人が孔子のひととなりを弟子の子路に尋ねたところ、子路は即座に答えることができなかった。あとでこのことを知った孔子が子路に言った。「なぜおまえはこつ言わなかったのか？ 孔子は学問が好きで、分らないことがあると食事も忘れて研究に没頭してしまう。疑問が解けるとうれしくて、それまでの苦労をげろりと忘れてしまふ。このように学問に打ちこんで老いの訪れにも気づかないのだ」と

そう、寝食も忘れて打ち込めるものがあれば、すくなくとも日々老いの足音におびえて暮らさずにすむ。その意味で、私は作家になれて本当によかった。十年以上書きつづけているが、いまだに書くことに夢中だ。五十になろうと六十になろうと、私にとって大切なのは小説を書き続けることだ。自分を慰めてくれる作品を、いつまでも書いていたい。書くという行為は、これからますます私を救うことだろう。文字を書き連ねているあいだ、私は永遠に歳を取ることがない。

もしもいつか私が書くことに満足して自然と筆を置く日が来たなら、それは私が幸せになってしまった証拠だ。もはや書くことを必要としないうほ、心が落ち着いてしまったのだから。私の老いは、たぶん、そこからじまる。

(作家)